

文化としての共創表現

—手合わせ表現を手がかりにして—

○三輪 敬之 (早稲田大学)

Co-creative Expression as Culture -As Guided by Hand Contact Improvisation-

○Yoshiyuki MIWA (Waseda University)

Abstract: Co-creation and ba are inseparable. Grounded in the research on hand contact improvisation that the authors have been engaged in, this paper argues how horizontal as well as vertical cultivation of ba, which is viewed as an expression, will lead to the new scientific and technological creation based upon co-creation. The authors also discuss the fusion of engineering and culture that the cultivation brings about.

1. 共創とは何か

共創は、背景や価値観の異なる多様な人々が思いや夢を共有して、一緒になってそれらを実現していく創造的活動である^[1]。しかし、共創を支援する工学技術の設計論や方法論は未だ確立されているとは言い難い。そこで、何故そうなのかをあらためて問うことは、共創システム技術を我が国の独創的技術として位置付けるために、必要不可欠であると考えます。

場のない世界に共創は起こらないといわれるように、共創と場とは不可分の関係にある^[2]。しかし、これまでの多くの研究は、場を他者との間の水平方向のみに広げ、同一平面的な共有やそのための方法、技術を論じている。一方で、共創の本質はむしろ、場を垂直方向に耕していくことにあるのではないかと。そして、場を表現として理解することが必要になるのではないかと。本小論では、こうした視点の転換を出発点に、共創を新たに捉えなおすことを試みたい。それを踏まえ、2012年11月号の「計測と制御」の特集「共創システム」の巻頭言^[3]において著者が提起した、“原発事故まで引き起こした未曾有の大震災は私たちに何を問いかけているのか”という問題に対して、その答えは、共創から生まれる新しい科学・技術、さらには文化との融合にあることを指し示すことができたらと思う。

2. 場を表現として捉える

著者は8年ほど前から、共同研究者の西洋子が主宰するインクルーシブな身体表現活動(NPO みんなのダンスフィールド^[4])の現場に着目してきた。ここでは、障碍の有無や世代、性別、舞踊経験などに関係なく、身体を通じて表現を共に創りあう身体表現の共創が自然に行われている。そこには誰もが自分となって表現を深め、自身の可能性の探求を前提とした“表現の対等性”がある。それが保証されることで、多様な人々

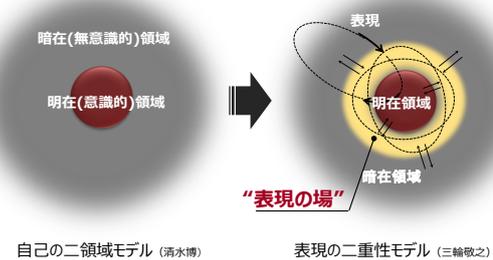


Fig.1 Model of duality of expression

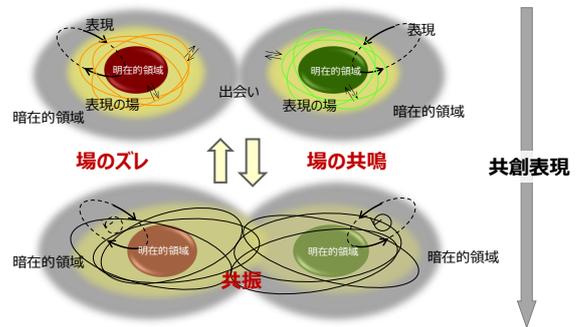


Fig.2 Model of co-creative expression

は表現で出会い、表現でつながることを実現していくのである。この表現の対等性が生まれるためには、多様な人々のあいだの差異を包み込むような場の感覚あるいは感性—これをインクルーシブ・センスと著者は呼んでいる^[5]—が必要になるはずである。このインクルーシブ・センスは、身体表現によって場が垂直方向に耕されることで、それぞれの個に生成するのではないだろうか。したがって、場を表現として捉え、共創を共創表現として捉えなおすと、場を耕すことからはじまり場の垂直方向への深化を問い直す、新しい共創支援の道がみえてくるはずである。

この問いを深めていくために、著者は、清水博による自己の二領域モデル^[2]を参考にして、“表現の二重性

モデル”と“共創表現のモデル”を先に提案した⁶⁾(図1,2). 二領域モデルでは、自己の暗在領域と他者のそれとがインタラクションすることによって場が共有され、共創が起こるとしている. しかし、これは場を水平方向に個と個の関係を広げていく上では有効なモデルといえるが、垂直方向に場を耕していくダイナミクスを説明するには不十分である. それに対して、表現の二重性モデルでは、暗在領域と明在領域の働きがインタラクションする場所に場が生成することによって自己が立ち上がってくることを、そしてそれを媒介するのが表現であるとしている. このように場を表現として捉えたと、表現によって場が耕されることによって、“私たち”が立ち上がり、“私たち”の表現が創出されることになる. このような“私たちの表現”を著者は“共創表現”と呼んでいる.

3. 場を耕す手合わせ表現

場を耕すことやインクルーシブ・センスについて著者が考える起点となったのが、西洋子によって長年にわたり実践されてきた“手合わせ表現”である. 手合わせ表現は、手のひらと手のひらを直接触れ合わせながら、即興的に表現を創りあっていくことを基本にしている. そして、この手合わせ表現によって二人の関係が深化していくことが、西により見出されている⁷⁾. それは大きく分けると5段階からなる(図3). すなわち、参加者の身体表現は、自己の鏡をふくような自己中心的なモード1から、自己の領域に相手を招き入れ、相手側の空間を探索するようなモード2へと変化する. 次に、自他の領域を含む広い空間内を自在に動き始めて、共同で描画作業をしているかのようなモード3へと移行していく. モード3は Collaboration 的な活動に相当するとみなされる. この段階では、いまだ自他の境界が存在するが、モード4に移行すると、双方が描く表現世界のなかに自ずと入り込み、“私たち”の表現そのものに包まれるようになる. ここに至って、表現の共創(Co-creation)が進行する. さらに、モード5では

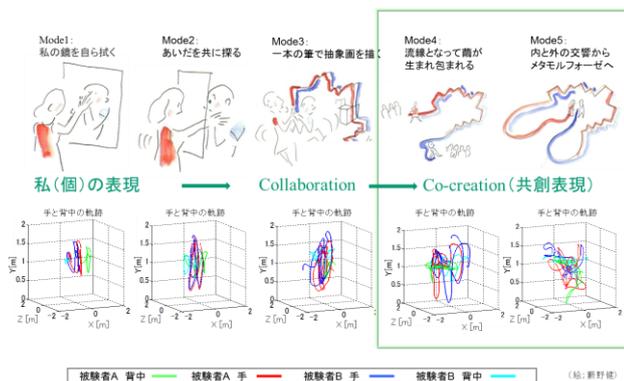


Fig.3 Deepening stage of relation through hand contact improvisation

“私たち”を包む表現世界それ自体が外に開かれることによって、表現の多様化と持続が可能になる.

以上のような一連の変化を、場を水平方向に広げることのみで説明できないことは明らかである. 加えて、私たちが場を耕していくといった解釈も正しくないだろう. そうではなくて、手合わせ表現そのものが場を耕していくと理解されなければならない. 場が耕されることで、個と個の局在的なつながり感を越えたインクルーシブ・センスが引き出され、それによって“私たち”が立ち上がり、そこから、“私たち”の表現、すなわち共創表現が自ずと生まれてくるのである.

4. 手合わせ表現を測る

さらに著者らは、モード1から5への移行における表現の深化ダイナミクスを調べるために、前後方向一自由度の動きに限定した手合わせ表現計測システムを開発し、それをを用いた身体動作の計測を行った⁶⁾⁸⁾(図4). その結果、共創表現においては、意識に上らないそれぞれの身体全体の動き(床反力中心の変化)が、双方で創りあう手のひらの動きに時間的に先行することや、手のひらの動きのリターンマップをとると、カオストラク的な構造が存在することなどが見出された(図5). このような構造を著者らは“場のアトラクタ”と呼んでいる. さらに、互いの力のやりとりを調べてみると、モード1レベルの表現では、押す側とそれを受ける側がはっきり分かれてしているのに対して、モード4レベルでは、それらを分けることができない結果が得られた(図6). これは相手の力を支えつつ引くことによって、相手の思いが受けとめられると同時に、相手も同様にそれを受けつつ押しているためと解釈される. このことは、共創表現では、する・されるという受動・能動的な自他の水平的関係から“私たち”の表現が生まれるのではなくて、そのように自他を分けることができない、なる・するという中動相的な状態から、“私たち”が立ち上がってくることを示すものである. また、これによって、共創表現に必要な表現の同時性と相補性が実現されるものと考えられる.

西らの実践的研究もふまえ、以上を総合すると、手合わせ表現においては、表現それ自体が表現を引き出

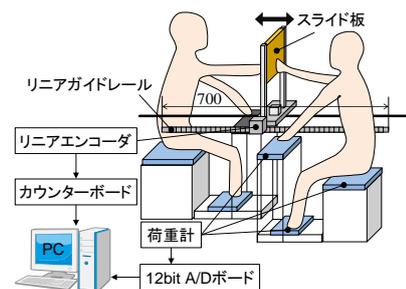


Fig.4 Measurement system of hand contact improvisation

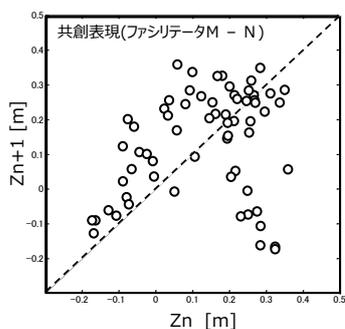


Fig.5 Return map in hand contact improvisation

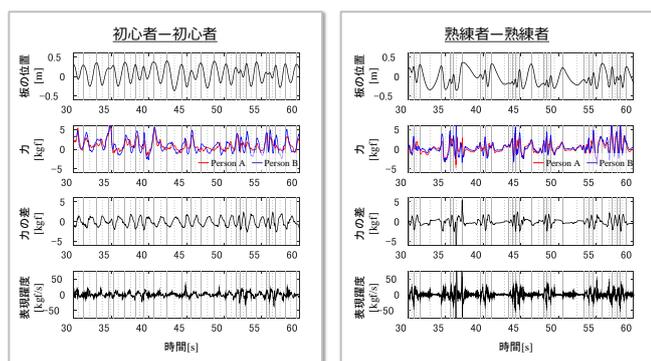


Fig.6 Results of hand contact improvisation

していく、表現の自己言及ともいえるべきことが起こることによって、場が耕されつづけていくことが示唆される。その場合、共創表現においては、表現のなかに自己と他者が巻き込まれ、その過程のなかで生成する場に“私たち”の表現がその都度立ち上がってくるのではないかと考えられる。図 2 に照らし合わせるならば、場が耕されることによって、場の共鳴やズレが起こり、それが共創表現として表出されることになる。つまり、“私たち”の表現には個と個の水平方向の関係をも包摂する垂直方向への場の深化が必要になるということである。このように主語（名詞）からではなく、述語（動詞）的な世界から出発するのが手合わせ表現であるといえよう。

5. 場のファシリテーションと表現耕法

著者は、2011年6月に東日本大震災の被災地である宮城県仙台市を訪問したのを皮切りに、2012年12月より、石巻市や東松島市において、西洋子の主導で被災者とともに「手合わせ表現ワークショップ(WS)」をほぼ毎月、定期的実施してきた^[9] (図 7)。この WS には、被災した発達障害児らも数多く参加している。そして今では、この WS がみんなの居場所となり、その開催を多くの人が心待ちにするようになった。手合わせ表現を続けることによって場が耕され、共創表現が生まれることは先に述べた通りであるが、WS は様々な人々が参加する集団的活動であるため、場が一様に耕されるわけではない。実際の現場には多様な表現の場



Fig.7 Workshop of hand contact improvisation

が混在し、重層的、横断的な様相を呈することになる。このような場の多様さを一様化せず多様なままに耕していくのがファシリテータの仕事である。これは、通常ファシリテータが課題全体を知って個々人の表現を先導し、互いのあいだの差異を調整していくことと対照的である。つまり、ここでのファシリテータは、場の濃淡を身体でつかみながら、その流れのなかで最も受動的に振る舞い、下から駆動するようにして参加者の主体性や潜在性を引き出していく者と規定される。このようなファシリテータの存在によって、やがて参加者の間にも互いに場をファシリテーションしあう関係が自ずと生まれてくることに、このファシリテーション技術の大きな特徴がある。場が深化していくことで、みんながファシリテータになっていくのである。

このような場を耕し深化させていくファシリテーション技術は、著者が西洋子や郡司幸夫らとともに提唱した表現耕法^[10]の中心に位置付けられるものであり、インクルーシブな共創のコミュニティや社会を支える基盤技術となることが期待される。さらに、場のファシリテータ養成は共創の場づくりをしていく上で急務な課題となってきた。これらのことから、その設計論やデザイン手法に焦点をあてたシステム論的研究がこれまで以上に必要となることが予想される。

6. 共創のコミュニケーション支援

共創支援の手始めとして、著者らはいつでもどこでも誰もが簡単に手合わせ表現を行うことができる卓上型手合わせ表現装置を開発し、それをを用いて、場を耕すことを試みている^[11]。この装置を被災地に持ち込んでみたところ、驚いたことに、言葉をほとんど話すことができない自閉症児をはじめとする発達障害児が装置に関心を示し、現場にいた西洋子や学生、さらには施設の先生、母親、他の障害児を相手に手合わせ表現を自ら進んで繰り返し行ったのである (図 8)。WS に参加はしても、主体的に手合せ表現を行うことのない自閉症児が、この装置ではじめて手合わせ表現をしたことに周りには大きな感動を覚えた。ある発達障害児は、十数回装置を体験したあとに、装置をさしながら「支援学校の先生にみてもらいたい」と言葉を発した。普段は他者とのかかわりや接触を極端に避ける彼のつぶやきは、「僕はこんなにも誰かと表現をつくることで



Fig.8 Support of co-creative expression desktop hand contact improvisation system

きるのだ」と誇らしげに主張しているように受け取られ、殊更印象的であった。

いずれにせよ、スライド板を介して双方が手をあわせ表現するだけで誰とでも楽しくつながることができる、この装置が持つ社会的意義は極めて大きいと考えられる。何故なら、共創表現という視点から装置を設計することによって、社会とのコミュニケーションチャンネルが閉ざされがちな発達障害児・者や認知症患者たちとの間のコミュニケーション（交流可能性）の枠を広げていくことが期待できるからである。

さらに、著者らは、離れた場所間で共創表現を実現できる通信システムの開発を現在、目指している^[1]。そのために、意識に上る手のひらの動きを明在的な“私”、意識に上らない身体全体の動きをもう一人の暗在的な“わたし”と見立て、“私”と“わたし”の間で手合わせ表現する、一人手合わせ表現装置を開発した。これは両者の動きのズレによって暗在領域の動きが自ずと引き出されるようにシステムを制御することで、表現の場が耕されるのではないかという考えの基に設計されている。そしてこの装置を離れた場所にそれぞれ設置し、暗在的な“わたし”のみを双方でインタラクションさせることによって共創表現を他者とつくりあうことを試みている。

7. 共創表現は文化をつなぐ；試論として

石巻や東松島での手合わせ表現 WS は、既に 50 回を超える。手合わせ表現では、被災児・者、重度自閉症児、知的障害児らみんなが一緒になって生き生きとした時を共に創りだしていく。最近では、WS だけでなく家庭や福祉施設でも行わるようになってきた。例えば、家族には家庭という場が必要不可欠であるが、手合わせ表現は家庭という場を耕し、家族のつながり感を取り戻したり、深めたりするものとして位置付けることができよう。仮に家族をモノ、家庭をコトと捉えるな

らば、手合わせ表現はモノとコトを橋渡しするインタフェースとしての働きを担うとみなされる。それによって、目に見えない共創が形あるものとなり、被災地におけるコトの復興が進むことが期待されるのである。

コトの復興は、モノの復興とは異なる。したがって、これまで我が国の産業社会を支えてきた近代科学に基盤を置くモノ中心の工学技術によっては進まない。著者は、コトの復興の本質は生活文化の復興、創造にあると考えている。では、具体的にどうすればよいのか。一つの小さな手がかりは、前述の表現耕法としての手合わせ表現装置にあるのではないだろうか。何故なら、コトがモノに現れ、モノがコトを表すことが装置を通して行われているからである。少し飛躍するかもしれないが、重要なのは、その様相の変化が装置の“表情”となって現れ出ることである。さらに共創表現をもたらすインクルーシブ・センス（場の感性）は我が国で培われてきた場の文化と通底する心性であると推察される。以上から、著者は、共創表現の科学技術は、文化との融合を起こすとともに、生活文化の創造に向かうことを想像している。

謝辞

本稿を作成するにあたり、貴重なご意見を戴いた東洋英和女学院大学、西洋子教授に感謝の意を表する。

参考文献

- [1] 清水, 久米, 三輪, 三宅; 場と共創, NTT 出版, (2000).
- [2] 清水: 場の思想, 東大出版会, (2003).
- [3] 三輪: 今, 必要なこと, それは「共創」, 計測と制御, 51 巻 11 号, pp.1011, (2012).
- [4] <http://homepage3.nifty.com/inclusive-dance/>
- [5] 三輪: 身体表現で“自分である”実感取り戻す, 産官学連携ジャーナル, 11 巻 3 号, pp.21-24, (2015).
- [6] 例えば, 三輪: 共創表現とコミュニケーション支援, 計測と制御, 51 巻 11 号, pp.1016-1022, (2012).
- [7] 西, 柳澤, 辻, 渡辺, 三輪; 身体表現の共創-手合わせ表現における身体動作創出過程の検討-, 第 13 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会 (SI2012) 論文集, pp.111-112, (2012).
- [8] T. Watanabe, Y. Miwa; Duality of Embodiment and Support for Co-creation in Hand Contact Improvisation, Journal of Advanced Mechanical Design, System, and Manufacturing, Vol.6(7), pp.1307-1318, (2012).
- [9] <http://teawasekaken.jp/summary.html>
- [10] 三輪, 西, 郡司, 板井; 表現耕法による共創のシステムデザイン-手合わせ表現における“私”と“わたし”-, 第 15 回 計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会 (SI2012) 論文集, (2014).
- [11] 林, 岩成, 三輪, 西, 板井; 卓上型手合わせシステムによる共創表現活動の社会的支援, 第 16 回 計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会 (SI2015) 論文集, (2015) (発表予定).